

第一問 次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】は、いずれも藤川直也（むらかわなおや）『誤解を招いたとしたら申し訳ない 政治の言葉／言葉の政治』の一部である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、出題の都合上、本文を一部省略した箇所がある。

【文章Ⅰ】

犬笛は犬には聞こえるが人には聞こえない。これにちなんで、幅広い聞き手に向けられた表向きメッセージとは別のメッセージを一部の聞き手にこっそり伝える発言を、犬笛と呼ぶ。表向きは問題のない表現だが、仲間内ではある差別的な内容を伝えるものとして理解される隠語の使用は、^アテンケイ的な犬笛だ。犬笛は、差別的な内容に限らず、表沙汰にするとかかしら問題になる内容の伝達によく用いられる。^{（注1）}ソールは次の例を挙げている。二〇〇三年の一般教書演説で^{（注3）}ジョージ・W・ブッシュは次のように述べた。

「しかし、力が、奇跡を起こす力が、アメリカの人々の善良さと理想主義と信念のうちにはあるのです」^A

「奇跡を起こす力 (wonder-working power)」は讚美歌（さんびか）から取られた言葉で、^{（注4）}キリスト教原理主義者にとって、それが「キリストの力」を表す隠語の役割を果たす。それゆえ、この主張は、キリスト教原理主義者にとって、このことを解さない多くの人は異なり、その文字通りの内容に加えて、キリストの力がアメリカの人々の善良さと理想主義と信念のうちにはあるという内容をも伝える。それだけではない。キリスト教原理主義者は、ブッシュがそうした自分たちの仲間内で知られた用法をシェアしているという事実から、彼がキリスト教原理主義者の仲間であるというメッセージをも受け取ることになる。もちろんブッシュはこのことを意図していた。にもかかわらず、キリスト教原理主義者に対するメッセージなのかと問われたとしたら、「そんなつもりはない、讚美歌から言葉は取ったが、言ったこと以上の他意はない」などと

言って、そのことを否認する余地が彼にはあるだろう。(中略)

犬笛は表向きの内容——これはしばしば当たり障りのない内容だ——と、一部の人にだけ向けられた隠れた内容——こちらはしばしば表沙汰にしてしまうと問題視されうる内容だ——という二種類の内容をあわせもつ。この二重性は、犬笛が伝える隠された内容を裏の意味にとどめておくのに一役買っている。つまり表向きの当たり障りのない内容だけを伝えているということが、隠された内容の伝達に対する代替解釈文脈として機能するのである。

【文章Ⅱ】

本書の基礎にあるのは、意味の表と裏、(注5)げんち言質の有無を左右するのは否認可能性だ、という考えだ。何かを意味しつつも、それを否認する人がいる。そうした否認が通用しない、ということが言質を与えるということであり、言質を取られた人は、意味したことと行動を一致させる責任を負う。そうした否認が通用するなら、その人は言質を与えておらず、意味したにもかかわらず、言行一致の責任を負うことはない。

こうした考えのもと、表と裏の境界を揺るがし、言質の有無を不確かにする一つの要因として本書が注目したのは、否認可能性の多様性だ。否認が通用する仕方、つまり、意味しておきながらそんなことなどなかったかのような話し手の振る舞いが容認される仕方は一つではない。(中略)

意味の表裏の境界を揺るがし、言質の有無を不確かにしうるさらなる要因は、言葉の意味の揺らぎ、それから発語内(注6)の力の揺らぎだ。何をすれば言行一致になるのかは、言葉の意味と発語内の力に左右される。だが言葉の意味や発語内の力は場面場面で調整されたり、場面場面での調整を超えて大きく変化したりする。こうした調整や変化によって、同じ言葉を使った発言であっても、場面場面で、言行一致の責任のあり方が変わり、意味の表裏が揺らぐことがある。かくして発言に伴う責任は絶対不変ではなく、意味の表と裏の境界は揺らぎうる。

こうした意味の表裏の揺らぎは悪用されうる。そしてそれは、不当に言質を逃れようとするものにとっての付け入る隙だ。犬笛は、異なる否認可能性の間の揺れを巧みに利用することで、社会的に認められないことがらをやり取りしつつ非難を免れる手段となる。言葉の意味や発語内の力が変わりうるということは、意味や力には、人がそれらを自分の都合のいいように捻じ曲げようと交渉する余地があるということでもある。

悪用の可能性をもつ意味の表裏の揺らぎに私たちはどう向き合っていけばよいだろうか。

悪用の可能性があるものなんかなくしてしまえばいい、そう思われるかもしれない。しかし、意味の表裏の揺らぎをなくすことはまず不可能だ。たとえば、誤解じゃないとわかっているかどうかの基準が場面場面で揺れる、それゆえ誤解の余地としての否認可能性が揺れるというのは、知識というもののあり方からして避けがたいことであり、私たちにどうことができることではない。あるいは、言葉の適用例やそれに伴う責任のあり方を隅から隅まであらかじめ確定しておくことはできない、というのはおそらく言葉の本質であり、だとすれば、意味から遊びを取り除くことなどそもそも不可能である。意味の表裏、言行一致の責任のあり方を左右するさまざまな要因の不確定性ゆえに、意味の表裏の揺らぎを完全になくすことはできない。

だとしても、責任逃れのための悪用の余地を減らすために、意味の表裏の揺らぎを極力少なくすべきではないのか。

本当にそうだろうか。私はこうした方針に抗^{あらが}いたい。忘れてはならないのは、意味の表裏の揺らぎ、言質の不確かさは、私たちのコミュニケーションを豊かなものにもする、ということだ。否認可能性のある一つの基準を杓子^{しやくし}定規に当てはめて意味の表裏を決めるのではなく、状況に合わせて柔軟にその境界を決める余裕が私たちのコミュニケーションにはある。言行一致の責任の中身を決める言葉の意味と発語内の力が不変でないということは、それがニーズや状況に応じて変化する柔軟性をもつということでもある。言葉の意味に遊びがあるからこそ、それを場面場面で調整することでその場にピッタリな言行一致の責任を作り上げることができる。発語内の力にもニーズに合わせたリ^(注7)デザインの余地があり、それに

応じて言行一致の責任は変化しうる。言葉の意味そのものや、発語内の力の基本的なあり方を変えるよう交渉することさえとときに可能であり、こうした交渉の可能性は、コミュニケーションを支える言葉の社会インフラを改良する余地でもある。

意味の表裏の揺らぎ・言質の不確かさをヨクセイするというのは、こうした豊かさを犠牲にすることでもある。あらかじめガチガチに決めておいた画一的な基準を杓子定規に当てはめるといふことによつて生まれるのは、随分と余裕のない、融通の利かないコミュニケーションのシステムだ。たとえば、誤解じゃないということがわかつているかどうかを基準とした否認可能性、つまり認識的な否認可能性こそが意味の表裏を決める唯一の基準だと考えることで生まれるのは、人間関係の円滑円満さのために対人関係の規範を認識的なそれに優先させることを許さない、幾分ギスギスした不寛容なコミュニケーション像だろう。あるいは、法廷での発言についてはわかりきった言外の意味でも言質を免れるという仕組みは、法廷での特殊事情に鑑みた一つの制度設計だが、認識的な否認可能性を□としてあらゆる場面で適用するというのは、こうした柔軟な制度設計を不可能にする。意味の遊びや交渉の余地という揺らぎを認めないということは、排他的な思想——たとえば、「結婚」という言葉が異性カップルにしか当てはまらないのはその言葉の意味からして揺るぎないのであり、同性カップルに「結婚」が適用される遊びや交渉の余地などない、という思想——に口実を与える。画一的な基準はときに排除の原理となるのだ。あるいは、発語内の力に変化の余地を認めなければ、民事裁判における立証責任の転換の余地もなくなろう。

^D 意味の表と裏の揺らぎ・言質の不確かさは、それを悪用する人にコミュニケーションにおける責任逃れの余地を与える一方で、私たちのコミュニケーションを豊かなものにもする。こうした豊かさを維持しつつ責任逃れを野放しにしないような、意味の裏表の揺らぎ・言質の不確かさのよい匙加減を見出すこと、これこそが一つの社会的課題ではないか。そして、その役に立つのは、豊かさの源でもある揺らぎを適度に残しつつも、その悪用を牽制する方法を見つけていくことだ。この点について二つの視点をシサ^ウすることで本書の締めくくりとしたい。

一つは、言行一致の責任帰属の正当さがいかに脅かされるのかを明るみに出すということだ。たとえば他のどんな基準にも反して個人の都合を押し通すことで言質の有無を決めることが正当化されることはないだろうし、あるいは認識的正義という社会的不正義の影響が認識的な基準に基づく責任帰責を不当にすることもあるだろう。言葉の意味や発語内の力を調整・変化させる試みもまたさまざまな仕方でも不当になりうる。コミュニケーションに限らない一般的な規範——社会のインフラを扱うことに伴う社会的な責任であったり、相手のことを考えずに個人の都合を押し通すことの悪さであったり——に照らして言質の決定がいかにして不当なものになりうるのか、それを理解し、必要とあれば個々の場面でそれを指摘することは、言質の揺らぎの悪用を牽制する一つの手段である。

こうした不当さの指摘とは別のもう一つの視点は、責任逃れのための言質の揺らぎの悪用が今あるコミュニケーションの仕組みを脅かす構造を指摘する、というものだ。誤解を解くための正当な「そんなつもりはなかった」と責任逃れのための「そんなつもりはなかった」の間には、それぞれの有効性についてのトレードオフ(注9)関係がある。責任逃れの余地をなくそうとして「そんなつもりはなかった」が通用する基準を厳しくすると、それに合わせて本当の誤解を解くための正当な「そんなつもりはなかった」が通用する基準も厳しくなる。(中略)意味の表と裏の揺らぎを利用した言質逃れは、このようにして今あるコミュニケーションの仕組みをじわじわと蝕むしばんでいきうる。この構造を指摘することは、言質の揺らぎを利用した責任逃れを牽制しコミュニケーションの豊かさを守るために本書から引き出しうるもう一つの手段となろう。

(注) 1 ソール——ジェニファー・M・ソール。イギリスの言語哲学者(一九六八)。

2 一般教書演説——アメリカ合衆国の大統領が連邦議会で行う施政方針演説。

3 ジョージ・W・ブッシュ——アメリカ合衆国第四十三代大統領(一九四六)。

4 キリスト教原理主義者——キリスト教徒のなかでも保守的な信仰理解を持つ一派。

- 5 言質——のちに証拠となることば。
- 6 発語内の力——ある言葉を発することによって、聞き手に働きかける力。例えば、「約束する」と発言した場合、話し手は単に音声を発したわけではなく、聞き手に対し取り決めを守るという行為を遂行することになる。
- 7 リデザイン——デザインし直すこと。
- 8 社会インフラ——国民の生活や経済活動を支えるための基本的な施設や設備の総称。
- 9 トレードオフ——一方を立てればもう一方が立たないという関係。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが 1、イが 2、ウが 3

ア テンケイ

- a 気がドウテンする
b 美術館でコテンを開く
c シキテンを挙行する
d バス旅行のテンジョウ員

イ ヨクセイ

- a ヨクヨウをつけて朗読する
b 学習イヨクが湧く
c ヒヨクな土地が広がる
d プロジェクトのイチヨクを担う

ウ シサ

- a 犯罪をキョウサした罪
b 学歴をサシヨウする
c 化学的なレンサ反応
d シヨサが美しい

問2

空欄

に補うことばとして最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **4**

a 百花繚乱りょうらん

b 融通無碍むげ

c 金科玉条

d 進取果敢

問3

傍線部A「『しかし、力が、奇跡を起こす力が、アメリカの人々の善良さと理想主義と信念のうちにはあるのです』

とあるが、ブッシュのメッセージについて筆者はどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次

のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **5**

a ブッシュが「アメリカの人々の善良さと理想主義と信念」の源にキリストの力があると考えていることと、ブッシュがキリスト教以外の信仰を持つ人々も尊重していることが伝わるが、これらを表向きは否定できる。

b ブッシュがキリストの力によって「アメリカの人々の善良さと理想主義と信念」の基礎が作られたと考えていることと、ブッシュがキリスト教原理主義者の仲間であることが伝わるが、これらを表向きは否定できる。

c ブッシュがキリスト教に基づく「アメリカの人々の善良さと理想主義と信念」は重要だと考えていることと、ブッシュがキリスト教原理主義者を重要視していないことが伝わるが、これらを表向きは否定できる。

d ブッシュが「アメリカの人々の善良さと理想主義と信念」があるからこそ奇跡を起こす力の存在を信じていることができると考えていることと、ブッシュが賛美歌に精通していることが伝わるが、これらを表向きは否定できる。

問4 傍線部B「犬笛は、異なる否認可能性の間の揺れを巧みに利用することで、社会的に認められないことがらをやり

取りしつゝ非難を免れる手段となる。」とあるが、「社会的に認められないことがら」を意図して発言しながら、どうやって非難を免れようとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は

6

a 発言の中身が本質的な内容のものであれば表現の巧拙は大きく関与しないと言い張ることで、発言した責任は取る必要がないと問題をすり替えている。

b 発言がどのように聞こえ、聞き手にどのような影響を与えるかは場面によってさまざまであり、自らの発言は言葉通りのものだと言い逃れをしている。

c 話し手と聞き手の社会的な立場の違いから圧力をかけて、問題がある発言などしていないと事実を捻じ曲げることで、反論の余地を与えないようにしている。

d 聞き手によって立場が異なることを逆手にとつて、問題があるように聞こえるのは聞き手の邪推だと主張することで、話し手が負うべき責任を回避している。

問5 傍線部C「言葉の意味に遊びがある」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを、次のa～dのうちか

ら一つ選べ。解答番号は **7**

a 言葉は、ある発話意図に対して一つの表現しか存在しないというのではなく、ニーズや状況に応じたさまざまな表現があるということ。

b 言葉は、格調高い表現でしか伝達できないというのではなく、冗談やしゃれのような軽妙な表現でもコミュニケーションをとることができるということ。

c 言葉は、その意味が基本的には一つに限られるものであるが、他の言葉と一緒に用いられることで新しい意味が加えられるということ。

d 言葉は、一つの意味しか表さないというのではなく、それが発せられる場面や状況によって多様な解釈があるということ。

問6 傍線部D「意味の表と裏の揺らぎ・言質の不確かさは、それを悪用する人にコミュニケーションにおける責任逃れの余地を与える一方で、私たちのコミュニケーションを豊かなものにもする。」とあるが、それはどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は8

a 言葉の意味や発語内の力が一つに定まっていなくて、言行不一致や犬笛を用いるといった責任逃れをする人が出てくる。しかし、意味の揺らぎがあることによって言葉そのものが見直され、人間が人間らしく暮らせるようなより良い社会作りに向けた対話が実現するということ。

b 言葉の意味や発語内の力が一つに定まっていなくて、言行不一致や犬笛を用いるといった責任逃れをする人が出てくる。しかし、このような意味の揺らぎがあることによって、現実の場面に応じた柔軟なコミュニケーションが可能となり、円滑円満な人間関係の構築に結びつくということ。

c 言葉の意味に揺らぎがあり言質に不確かさが生じることで、「そんなつもりはなかった」と責任逃れの発言をする人が出てくる。しかし、コミュニケーションを通して交渉の可能性を見出し互いを知らうとすることで、責任逃れをする人も許容できるような寛容な精神が養われ、円滑円満な人間関係が築かれるということ。

d 言葉の意味に揺らぎがあり言質に不確かさが生じることで、「そんなつもりはなかった」と責任逃れの発言をする人が出てくる。しかし、誤解を解くための発言の正当性を厳密に判定することで、責任逃れの横行を許さず、言行一致を実現するコミュニケーションが是とされる社会正義が実現するということ。

問7 次を示すのは、本文の内容について四人の生徒が意見を述べている場面である。本文の趣旨に合致しないものを、

次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **9**

a 生徒A——本文の最初で「犬笛」が取り上げられていたね。言葉を悪用した責任逃れは、権力を持つ政治家と一般市民の間のように、話し手と聞き手の力関係が不平等である場合に行われてしまうんだ。逆に言えば、力関係の差が生じない親友同士のコミュニケーションなら、こんなことは起こりえないということだね。

b 生徒B——言葉の意味の揺らぎは責任逃れの原因になる可能性もあるんだけど、これをなくすことは不可能だと筆者は考えているよ。たしかに、言葉の意味が揺らがないように、基準をきっちり決めておくことは現実的ではないしね。私たちは言葉の意味の揺らぎを踏まえてコミュニケーションを調整していく必要があるよね。

c 生徒C——筆者は豊かなコミュニケーションを実現するために、意味の揺らぎの悪用を防ぐ方法を二つ提案しているね。その一つは、なぜ発言の責任がうやむやになってしまうのか、そのメカニズムを明らかにすることなんだね。例えば、政治家が責任逃れをしようとしているときなどはそのやり方を分析し、牽制する必要があるよ。

d 生徒D——言質の揺らぎがどうやって悪用されるかを知っておくことも大切なんだよね。普段からまじめな人が「そんなつもりはなかった」と言うなら信頼できる場合だつてあるね。すべてを責任逃れだと決めつけるようなことをしていると豊かなコミュニケーションが成立せず、不寛容で多様性を認めない社会になりかねないよ。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

「なぜ詩を作るのか」という問いに対して、ある詩人は「日常のことばの記号性を打破するために」と答えている。日常のことばでは、語形と語義の間に、慣習によって定められた結びつきが出来上がってしまっている。日常のことばを使っている限り、われわれはすでに多く惰性化した日常のことばの決まりの上に成り立つ日常の世界の中で、これまた惰性化した営みを繰り返すだけである。詩人の意図しているのは、この惰性に揺さぶりをかけるということである。既成の語形と語義の間の結びつきをずらしてみる。（例えば、「焰ほのおのつらら」のような比喻はその一つの場合である。）そして、その新鮮なことは遣いの創り出す意味を、日常の世界を超えるための踏み台とするわけである。

新しいことば遣いも、ある表現があることを意味している（あるいは、意味しているように解せる）という限りは、やはり「記号」であることには変わらない。しかし、それは、すでに定まった内容を慣習に従って何か表わしているというような「符号」^(注)ではない。むしろ、新しい「記号」が生み出され、その「記号」によって捉えられた新しい内容がわれわれの世界に新たな知見として加えられる。それは一つの創造的な営み——神学的な意味とは別の意味での「言語創造」の営みである。

「言語創造」と言うとか何か大変崇高なことに聞こえるが、実はこのような「言語創造」は、人間であれば誰しもが絶えず行なっていることである。朝の小鳥のさえずりに楽しい一日の予告を読みとったり、一枚の葉の落ちていく様子に天下の秋を知ったりする時、そこでは「記号」が作り出されている。人間は、すでに慣習的に定められた「記号」をあやつるばかりでなく、新しい「記号」をせっせと創り出しているのである。

現代の記号論がとりわけ関心を寄せる「記号」とは、実はむしろこのような「記号」なのである。こういう「記号」には、慣習としてすでに出来上がっている「符号」のような固定性はない。それらはいわばもっとしなやかなものであって、

「記号」ということばの適用にためらいすら感じさせる。

現代の記号論での議論では、「記号」ということばの代わりに「記号現象」（あるいは、「記号過程」といった用語がよく使われるが、これもそのような点を^アコリヨしてのことなのである。このように考える場合、いちばん基本になることは人間の「意味づけ」とでもいった行為——つまり、あるものにある意味を付したり、あるものからある意味を読みとったりする行為——である。人間が「意味あり」と認めるもの、それはすべて「記号」になるわけであり、そこには「記号現象」が生じている。この「言語創造」にも似た行為を、人間は絶えず、しかもその文化のあらゆる面で行なっている。その原型と本質を探ってみること——そこに現代の記号論は関心を向けるのである。人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義——その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組み変えていくか——現代の記号論はこういうことに関心を持っていると言いかえてもよいであろう。

ところで、人間の「意味づけ」の営み——それは日常生活のレベルでは、何よりもまず「ことば」の使用によって支えられている。もしそのようには考え難いというのであれば、それはすでに慣習として固定化したレベルでことばを捉えているからである。遡って、ことばが生まれる時点を考えてみるとよい。いちばん身近で単純な例は、日常生活における「命名」という行為である。

例えば自分が飼っている犬に「ポチ」という名前をつけるとする。なぜ名前をつけるか——もちろん他の犬と区別するためである。では、どうして区別するのか——それはその犬が自分にとって他の犬とは違った特別の価値を持っているという認識があるからである。（人間に対する命名を考えてみれば、この点をもっと明らかであろう。人間には誰しも名前が与えられるが、犬はそうではない——これはもちろん大変理由のあることなのである。）特別の名前が与えられることによって、そのものが他でもって代えることのできないものであるという意味づけが完了し、自分との関連が確認されるわけである。

^B 名前が与えられ、確認される対象は、例えば自分の親しい人とか、大切に飼っている犬とか、その正体も素性もよく分かっているものに限られる必要はない。例えば、あるグループの人たちが自分たちの行動・運命が何か自分たち以外のものによって支配されていると思えば、そのようなものに「ブーボー」と名前をつけたとしよう。（このような場合、名前をつけることをはばかって単に「印」——例えば⊕——でもって代えることもあるし、あるいは名前はあるのだがそれを言うのはタブーになっているということもある。しかし、いずれにせよ、それを表わす「記号」が出来たわけである。）そして人びとは自分たちが「ブーボー」という名前をつけた対象に働きかけて（例えば、祈りや供え物を捧げることによって）、自分たちの行動や運命に対する支配が好ましいものになるよう試みるであろう。しかし、「ブーボー」そのものの正体はその間、結局はよく分からないままかも知れない。

ただ、名前を与えることによって人びとは一つの存在を想定し、自分との関連でそれを位置づけてみようとしていることだけは確かである。「ブーボー」という記号は、未知のものを捉え、自分との関連で意味づけし、自分たちの世界に取り込もうとする人間の試みの産物である。少し考えてみれば、未知のものを意味づけるという記号の働きは、このような「宗教的シンボル」とか、捉え難い芸術的理想を象徴するといったような場合から、未知の素粒子や惑星を想定して理論的に論じてみるというような自然科学のセン¹タンの分¹野に至るまで、人間の文化的な営みに広く関わっていることが分かるはずである。

ことば（あるいは、一般に記号）による意味づけという営みを通じて、人間は自らにとって未知のもの、関わりのないものを自らとの関連で捉え、自らの文化の世界の中に組み込み、自らの世界をふくらませ続ける。

人間の記号による営みには、このように「創造的」と呼んでよい一面があると同時に、^C実はもう一つの重要な面があるということにも注意しておかなくてはならない。

再び、ことばを例にして考えてみよう。幼児がことばを習得する過程というのは、何も知らなかった自分のまわりの世

界を整理し、秩序づけていく過程でもある。例えば、「ママ」ということばが「マンマ」と分化する時、母親は「自分に食べ物を与えてくれる（そして、その他にも自分にいろいろなことをしてくれる）人」として、〈食べる物〉とは、区別されるべき対象であるという把握が出来上がる。外国語の習得される場合も同じである。英語の話し手が日本語を学べば、同じ〈兄弟〉(brother)であっても、年上の者(「アニ」と年下の者(「オトウト」)が言語習慣的に異なるものとして意味づけられていることを知る。

幼児も外国人も、このようにして自らの世界をだんだんとふくらませていく。そして、このような過程を通じて一つの言語の習得が完了した段階では、習得者は一つの意味づけの体系を身につけたことになる。

この過程が基本的には、すでに述べたような記号を通じての「創造的」な営みであることには疑いはない。幼児にとってはまったく未知の新しい世界を、外国人にとっては自らのものとは異質の新しい世界を、それぞれ築き上げる営みである。ただ、この場合、幼児も外国人も完全に自由に、自己の主體的な捉え方において新しい世界を創り出す立場には置かれていない。彼らの身につけるのは、習得することばの決まり(「コード」)によって支えられた既存の世界の秩序である。

「ママ」ということばを自分の母親と同年輩ぐらいの女性に区別なく適用する幼児は、周囲の人たちから注意されてそのような捉え方の許されないことを知る。日本語を身につけようとする外国人にとっては、「アニ」と「オトウト」を区別することを拒む自由はない。一つの言語を習得することは、一つの特定の捉え方——一つの「(ま)イデオロギー」——を身につけることでもあるのである。

ひとたび身につけた意味づけの体系——それが慣習として確立すると、それは逆にそれを身につけた人を捕えて放さない「(ろう)牢獄」にもなる。それを捉えた人間を、今度はそれがとりこにするのである。捕えられた人間は、その意味づけの体系の決まりに従って、ものを捉え、行動する。人間は機械のように動き、すべてが「自動化」する。何かが起こっているようで、実は何も起こっていない——そういう世界が生じてくる。

しかし、機械とは違って、人間は——一方では秩序を導入しなければ気がすまない存在であると同じように——完全に秩序づけられた閉じた世界に長くはアンジュウ^ウしていられない存在でもある。遅かれ早かれ、創造への営みに人間は駆りたてられる。そして、既成の秩序を部分的になり、全面的になり、組み変えることを試みるようになる。すでに見た通り、詩人は何よりもこのことばの牢獄に挑む人たちである。ここでは日常のことばを超える言語創造を通じて、新しい価値の世界が開かれるわけである。言語習得の場合と較^{くら}べると、もう一段階高い次元での意味づけの営みがなされるのである。

人間は、自分のまわりの事物に対して意味づけをしないではいられない存在である。□ その際の意味づけは、すべ

て人間である自らとの関連で行なわれる。自然的な対象であつても、それが人間との関連でどのような価値を有しているかという視点から捉え直され、人間の世界のものとして組み入れられる。その世界は、すぐれた意味での文化の世界である。そして、そのような世界の創造、維持、それから時間的・空間的いずれもの意味における伝達——こういったすべて

の文化的な営みに、人間が記号をあやつるといふ営みが深く関わっている。人間は確かに「記号を使う動物」なのである。
(池上^{いけがみ} 嘉彦^{よしひこ} 『記号論への招待』による)

(注) 1 符号——指し示すものと一対一に対応しているもの。

2 天下の秋——前漢時代の思想書『淮南子^{えなんし}』を由来とする故事成語「一葉落ちて天下の秋を知る」の一部。わずかな前兆を見て、その後を予知する比喩を指す。

3 イデオロギー——人間の意識や行動を左右する物事に対する根本的な考え方の体系。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが10、イが11、ウが12

ア コリヨ

- a 自分たちの力をコジする
b コイに誤った情報を伝える
c チームの士気をコブする
d コキヤクを満足させる

イ センタン

- a 問題解決のタンシヨをつかむ
b 自然の美しさにカンタンする
c 土地をタンポとして金を借りる
d ラクタンの表情を見せる

ウ アンジユウ

- a 大企業にジユウゾクする
b キョジユウ性の良い車
c ユウジユウ不断な性格
d 手当をカクジユウする

問2

空欄

に入ることばとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は

13

a なぜなら

b つまり

c むしろ

d したがって

e しかも

問3

傍線部A「それは、すでに定まった内容を慣習に従って何かが表わしているというような『符号』ではない」とあるが、筆者はなぜこのように言うのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は

14

a われわれが使用していることばは、日常の世界を成立させる秩序として体系づけられているものであるが、日常の世界は日々変化しているため、その世界を支えることばも常に変化を求められているから。

b われわれが日常用いていることばは、語形と語義の間に強い結びつきが出来上がってしまっており、人間の惰性化した日常の行為に従い、変化することなく固定的に用いられている側面があるから。

c われわれはすでに定まった慣習に従ってことばを用いるだけでなく、様々なものに意味づけすることや意味を読み取ることで、ことばとそのことばが指し示す意味に新たな関係性を創り出しているから。

d われわれはすでに使用されていることばをあやつるだけでなく、次々とことばを増やし、その新しいことばによって、さまざまな文化を創造し日常の世界を超えるための営みを続けているから。

問4 傍線部B「名前が与えられ、確認される対象は、例えば自分の親しい人とか、大切に飼っている犬とか、その正

体も素性もよく分かっているものに限られる必要はない。」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は 15

a 人びとは名前を与えることによって、漠然とした何かを一つの存在として想定し、それぞれが見出している対象の価値について集団内で共通認識を持つとうとすること。

b 人びとは名前を与えることによって、身近な存在だけでなく、宗教や芸術や自然科学などの高尚なもの、自分たちにとって好ましい形で操作できるようにすること。

c 人びとは名前を与えることによって、理解の範囲を超えている正体不明なものを認識可能な存在として位置づけ、自分たちの世界のなかに取り込もうとすること。

d 人びとは名前を与えることによって、ある対象について集団に属する個人が持っているさまざまな認識を統一し、名づけた対象への働きかけを容易にしようとするということ。

問5 傍線部C「実はもう一つの重要な面がある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は16

a 人間は一つの言語を習得すると、そのことばが慣習として受け継いでいる体系に従ったものごとを認識するため、そのことばの枠内でものごとを捉え行動するようになるということ。

b 人間はことばを習得していく過程において、対象の差異を把握してものごとを記号化していくプロセスを繰り返すことによって、自分の周りの世界に対する理解を広げていくということ。

c ことばを学び始めた段階においては、自分の周りの世界を主體的に捉え自由にことばを用いているが、ことばの理解が進むにつれて慣習からの逸脱が許されないことを理解できるようになるということ。

d ことばはそれぞれ背景となっている文化が異なり、一つの言語を習得するとその文化を至上のものであると考えてしまうため、異質な世界に対する興味が湧かず関心も持てなくなるということ。

問6 次に示すのは、授業で本文を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで後の(1)～(3)の問いに答えよ。

生徒A——ことばと言うと、情報や思想、感情などを他者に伝えるコミュニケーションの手段だと考えていたけど、この文章では、ことばを「記号」として捉えていて、ことばがもつ働きについて考えさせてくれるよね。

生徒B——筆者が言うように、確かに人間はいろいろなものに「意味づけ」しているよね。虹が出ているのを見て、何か良いことがありそうだなと思うのも「記号現象」として捉えていいんだね。

生徒C——こうしたことばの使用を考察するために、「命名」という行為を取りあげられているんだよね。

生徒A——自分の犬に「ポチ」と命名するのは、Xという例として取りあげられているよ。

生徒B——「ブーボー」の例も、「創造的」な営みと位置づけている。筆者はことばを「記号」として捉え、人間の営みを探ろうとしているんだね。

生徒D——筆者は詩人を「ことばの牢獄に挑む人」と表現している。この文章の最初の段落で取りあげられている「焔のつらら」は、Yという例なんだよね。

生徒C——このように見えてくると、Zということも言えるかもしれないね。

- (1) 空欄 Xに入る発言として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は 17
- a 名前に込めたことばの意味を他の人に伝え、命名の仕方に自分の好みを反映させる
 - b 犬と自分との関係性を確定させると同時に、人と犬との区別を明確にする
 - c 未知の存在から認識可能な存在へと変換させ、価値あるものとして共有する
 - d 他の犬との差異を明確にし、自分にとって代替不可能なものとして位置づける

(2) 空欄 **Y** に入る発言として最も適当なものを、次の a～d のうちから一つ選べ。解答番号は **18**

- a 新しいことば遣いによって人びとの注意をひくことで、自覚していない偏った見方を問い直そうとする
- b 語形と意味を日常的な使い方とは違う組み合わせにすることで、新しいものの見方を創り出すことができる
- c 日常を捉え直しわれわれの世界に新たな視点を加えることで、ことばには自由な用法があることに気がつく
- d 自分を取り巻く自然から新しい着想を得て理想的なことばを見出すことで、ものごとの本質に迫ろうとする

(3) 空欄 **Z** に入る発言として最も適当なものを、次の a～d のうちから一つ選べ。解答番号は **19**

- a 人間はことばという秩序を導入したからこそ、制約の中で規律ある生活をするのが可能となった
- b 新しい文化的な世界を創造していくためには、ことばに対する人間の姿勢を見直さなければならない
- c 認識可能な世界を広げることによって、文化的な営みに関わることばを増やしていくことができる
- d 世界の創造、維持、伝達などの人間の文化的な営みは、ことばのもつ記号性に支えられている